

# 家族

ライフ・ストーリー I

太田昭宏氏へのインタビューとともに、その人生の記録を編集部で書き起こしました

## 家族

井戸で冷やしたスイカをふるまつてくれた父。  
初月給で宇治金時をおごってくれた姉。

鶏肉をぐつぐつ煮込んでくれた母。

懐かしい「味の記憶」は、

「家族の記憶」と結びついていた。

## 戦後の時代の坂を

たくましい足どりで駆けあがつた一家にも、  
かつては戦争の影が色濃くのしかかっていた。

幼い子どもが次々に死去

「太田鏡平君、万歳！」

バンザイ、バンザイ……。

町内会長の音頭で、万歳がくり返された。

昭和十二年八月十四日。愛知県豊橋。軍服姿の男が口を真一文字に結んで、近所の人々の歓呼にこたえていた。出征兵士の勇ましい旅立ちの日である。

しかし、鏡平の妻・春子は、わきかえる人々の中で、少しうつむいた顔が晴れることはなかった。なぜならば、わずか一週間前に、幼い長男が息を引き取ったのである。小さな亡きがらを荼毘（だび）にふしたばかりだった。

息子が死に、今度は夫が戦地に行ってしまう——。

ほんの一週間のうちに、親子三人は引き裂かれ、春子は独りぼつちになってしまったのである。

出征にあたって、周囲の人たちは、決まり文句のように勇壮な言

出征風景（毎日新聞社提供）



葉を並べて、夫をたたえてくれた。「お国のために死ぬことは日本男児の誉れである」「靖国の英靈として帰還することが、眞のつとめである」。

春子の孤独な心中には、どれもむなしく響いた。しかし軍国主義に染まっていく時代に、そんな本心を口に出しては、非国民と非難されることだろう。ただ、感情を押し殺して頭をさげるのに精いっぱいだった。

日の丸の小旗が波のようにゆれ、その向こうに中国大陸におもむく夫・鏡平の背中が消えていった――。

この時、鏡平は二十九歳。春子は二十六歳。二人の間に昭宏が誕生するのは、これから八年後のことである。

日中戦争から、太平洋戦争にかけ、春子は「生と死」をめぐる悩みに、いつもさらされていた。日本が戦争に突き進んでいく時代に、長女、長男、次男の順番で子どもを授かつたが、いずれの愛児も生まれて数年のうちに、この世を去つている。

むろん春子には何の罪もなかつた。満足な小児医療も、子どもの成長に十分な栄養にも欠いた戦時下であり、事実、昭和前期の日本では子どもがよく亡くなつた。

春子にとつて、悲しい命日ばかりが増えていつた。しかも、夫は戦地へ出征。現代の感覚からすれば、その悲しい運命には、耐え切れない重さがあつたはずである。腹を痛めた子を、ひとり、またひとりと失い、夫もいつ「白木の箱」になつて帰つてくるかも知れなかつたのである。

しかし、明治生まれの春子は気丈だつた。「負けるものか」と、自分で自分を励まし、歯を食いしばつて生き抜いた。夫も必ず生きて日本に帰つてくることを堅く信じて疑わなかつた。そうでもしなければ、悲運に押しつぶされてしまうことを知つていたのかもしれない。

それでも張りつめた気持ちが、時にゆるむこともある。夫もいな。子どももいない。がらんとした留守宅で、ふと針仕事の手を休めたときなど、「なぜ親よりも先に子が死んでいつてしまうのか」と

いう悲しみに襲われた。

## 豊川大空襲の日

昭和二十年夏のことである。

日ごとに本土への空襲は激しさを増し、六月十九日の豊橋空襲で焼け出された一家は、豊橋から飯田線で奥に入った新城市（当時は町）に疎開していた。中国大陸から帰還した夫・鏡平も一緒に暮らしていた。

春子の胎内には、新しい生命が宿り、十月には出産の予定だった。昭和十八年に生まれた娘・雅子は元気に育っていたが、果たしてお腹の子が産まれるとき、日本の国はどうなっているのか計りかねるほど日本の敗戦は濃厚だつた。

八月六日、広島に原爆が投下。

同八日、ソ連が日本に対して、宣戦布告。

同九日、長崎にも原爆が炸裂。日本はまさに、破局に突き進み、地獄のような惨劇の舞台になつていた。

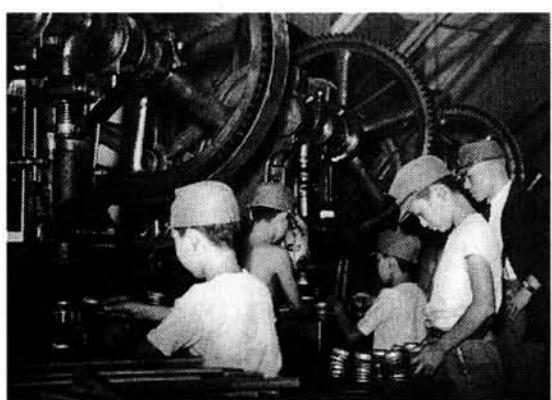
二発の原爆が投下されたはざまにあつたため、それほどクローズアップされなかつたが、ここ愛知県でも、尊い人命が大量に失われた悲劇があつた。しかもそれは、疎開していた春子たちのすぐ身近で起きたのである。

八月七日——。愛知県の三河地方は、朝から気温が上昇し、むし暑い一日になつていた。春子たちの疎開先・新城市に近い愛知県豊川市では、学徒動員された青年たちがいつものように軍需工場で仕事を取りかかっていた。

豊川には、東洋一ともいわれる海軍工廠（こうしょう＝軍需品を製造する工場）があり、五万～六万の人々が働いていた。

『豊川の熱い日 8・7空襲の記録』（創価学会青年部反戦出版委員会、第三文明社刊）によれば、真夏の光を切り裂くように、朝か

戦闘機を造る昭和国民学校の学童（毎日新聞社提供）



ら、警戒を発令するサイレンや空襲警報が鳴り響いた。

不気味なB29の大編隊が、豊川市の上空に現れたのは、午前十時前後のことである。海軍工廠が標的だった。「空襲警報！ 全員待避！」の発令が、工場の拡声器から流れたが、被害は甚大だった。

ザーッ、ザーッ……。百機以上の戦闘機が、空をおおい、雨のように千三百発の爆弾を投下していった。一時間の攻撃で、死者二千四百七十七名、負傷者一万名の犠牲者が出た。

豊川大空襲の日は、太田の人々の中でも語りつがれてきた。その様子を再現すれば、次のようなになる。

戦地から帰還した鏡平は、この豊川海軍工廠に勤務していたのである。朝、出勤したきり、いつまでも家に帰ってこない。春子は夫の身が案じられてならなかつた。新城からでも、豊川方面を襲つた戦闘機の爆音や異常な空襲警報は感じられ、夫が空襲に巻き込まれたことは間違いない。

春子は、じりじりと時が過ぎるのを待つた。妊娠八ヶ月である。

豊川工廠空襲の犠牲者の供養塔（毎日新聞社提供）



小さな生命が、母のお腹を蹴るように動いている。この子は、父親の顔を見ることがなく産まれてくるのだろうか――。

二歳になつたばかりの娘の雅子があどけない表情を見せている。血のつながつた子どもなら分かるかもしさないと感じた春子は、娘に聞いてみた。

「お父ちゃん、大丈夫かな……」

すると娘は、思いのほか、はつきりした口調で帰つてくると答えてくれ、妙に安心感をおぼえ、子どもに励まされる思いがした。絶対に大丈夫だ、と信じたものの、すでに夏の長い日も暮れ、空襲から十時間ほどたつてしまつた。

灯火管制下である。薄暗い電球に明かりをつけてから、一時間ほどたつただろうか、家の外で物音がした。入口の戸が開き、夫の声が飛んだ。

「おい、俺だ！」

夫の姿を見て、真夏の夜の悪夢を見るような思いがした。

血まみれである。顔面にも血がこびりつき、赤鬼の形相である。

とくにズボンは血で染まり、暗い明かりの下では、不気味に赤黒く見えた。

「父ちゃん！ 大丈夫かい！」

「平氣だ。そんなに大した傷はない」

傷が軽い割には、全身が血の雨を浴びたようである。聞けば、鏡平はこの時間まで、空襲の被災者を救出するため走り回っていたという。きまじめな鏡平は、困った人を見ると黙つていられない性分だった。半死半生の負傷者をおぶつて運んだため、鏡平の服や体も朱に染まつたのである。

春子は着替えや手当の準備をしながら、安堵の息をついた。

「よかつた……」

お腹の子の父親は無事だったのである。

太田家にも、日本にも、戦争の時代が終わりを告げようとしていた。日本がポツダム宣言を受諾して、敗戦を迎えるのはこれから八日後のことである。戦火をくぐり抜けた一家に、新しい生命が誕生

しようとしていた——。

## 平和国家一期生

戦争が終わつて初めての秋がやつてきた。

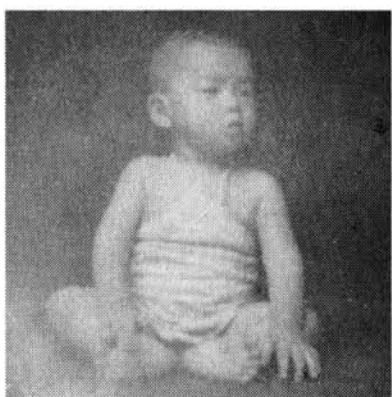
もう戦闘機が飛ぶことのない空は、ひときわ高く感じられ、朝の涼しい風の中に、キンモクセイの甘い香りが立ち込める季節になつた。

あの豊川空襲から一ヶ月がたつていた。昭和二十年十月六日。太田昭宏は、疎開先の愛知県新城市で誕生した。

実際に健康そうな、まるまるとした体つきだった。立ち会つた産婆さんも、この子は育つよ、と太鼓判をおすような新生児だった。瞳をまん丸く見開き、胸も丸く張つていたため、「マグロみみたいな赤ちゃんだ」と、人々は口々に語りあつた。

だれよりも喜んだのは、母・春子であろう。戦時中、すでに三人

誕生



の子を失った悲しみを、もう一度と味わいたくなかった。

いざれにせよ、戦争が終わり、平和の時代の到来を待っていたかのように、この世に躍り出た新しい生命である。近所や親せきの人たちも、どこかまぶしい目で産着（うぶぎ）にくるまれた昭宏を見つめていた。

戦前・戦中の古い価値観は崩れ落ち、軍国主義という目隠しをはずされた日本人が、まぶしい自由の光の中で世界に目を開いていった時代だった。ピンク色をした、まるまるとした赤ちゃんは、新生日本と一緒に誕生したのである。

「平和とは」「希望とは」「生命とは」——。昭宏の誕生は、さまでまな感慨を人々の心の中に、波紋のように広げていった。

戦後のベビーブームに生まれた世代を、作家の堺屋太一氏は「団塊の世代」と呼んだ。この世代が成長していく時代こそ、まさに急成長をとげた戦後日本の「青年期」と重なり合っていく。

「団塊の世代」に先がけて生を受けた太田昭宏は、いわば戦後の「平和国家一期生」として誕生したのである。

## 宗教に求めた「生と死」の問題

終戦からまもなくして、鏡平と春子は、新城市的自宅で小さな下駄屋を営み始めた。狭い間口の店先には、大人もの、女性もの、祝いの日に少女がはく赤い鼻緒の下駄などが、ぎっしりと並んでいた。

その一方で、鏡平は肌着材料のメリヤス製品の販売も手がけ、下駄屋の片隅に商品を置いた。終戦の時、すでに鏡平は三十六歳だった。今よりも平均寿命の短かった当時、すでに人生の半ばをすぎていた。もつとも気力・体力の充実した年代を戦争に奪われ、そのうえ戦後も、安定した職業につくチャンスがなかつた。その意味で、やはり鏡平も戦争の犠牲者だつた。

戦争の時代の波にほんろうされ、しかも幼い生命を次々に失った春子と鏡平には、どうしてもぬぐいきれない疑念があつた。

「なぜ子どもたちが死んでいくのか」「正しい人生とは何か」「どうすれば幸せになれるのか」

母・春子



父・鏡平



そんな人生における難問の解答は、思想や宗教に求めるしかなかつた。事実、昭宏の後に男児をもうけたが、残念なことにそれは死産だつた。一家の宿命との戦いは続いていた。その結果、いくつもの宗教や思想を遍歴していくことになるのである。

太田家に新しい宗教を持ち込むのは常に鏡平だつた。

「おい、今度の信心はすごいぞ。これは本物だ」

口マンチストな性格で、口ぐせは「すごい、すごい」。すぐに宗教の勧誘にも飛びつき、そのたびに失敗を繰り返していた。

豊川空襲で火の海の町を飛び回ったように、いい面に出れば人のために尽くすタイプだが、裏を返せば、向こう見ずで、お人好し。押し売りの口車に、ついだまされ、不要な品物を大量に買い込んでしまうこともあつた。

そんな夫に手を焼いたのが、春子である。下駄屋を開業したことも、夫の生活能力の甘さを見抜いていたためかもしれない。

事実、鏡平の仕事はどれも長続きせず、その収入は安定していたとはいがたかつた。地道だが、こつこつと春子が営んできた下駄

屋こそ、一家を支えていたのである。ロマンチストな夫と正反対に、春子が地に足のついた現実主義に傾いていったのも、自然の道理だった。

夫が持ち込む宗教にも、クールな目で対応していた。金集めが目的の宗教。あまりにも神がかり的な宗教。教義的に矛盾だらけの宗教。どれも信用できないものばかりだった。

ロマンチストな夫。現実主義的な妻。その両者の思惑が一致し、はじめて長続きした宗教が創価学会だつた。一家が、創価学会に入会したのは昭和二十九年のことである。小学校三年生だった昭宏も、自宅に初めて御本尊を安置したときの厳肅な空気は不思議と鮮明に覚えているという。

## 疎開先から豊橋市へ引っ越し

「とにかく無事で、死なないでもらいたい」

これが昭宏に対する春子の願いであり、同時に教育方針の根本だった。

昭宏は、注意深く、慎重に育てられた。たとえば、当時の町の人は、こんな光景を目撃している。子どもたちが木登りをして遊んでいた。幹をよじのぼり、枝の先に手を伸ばし、何かとろうとしている。ここまでよくある光景だ。しかし、よく見ると、木に登っているのは女の子で、木の下でじっと見ているのが男の子である。どこかつまらない表情でたたずんでいる、イガグリ頭の少年が、昭宏だった。

不慮の事故をおそれた両親から、昭宏は木登りを禁じられていたのである。また水難事故が報道されると、川遊びでおぼれないように、水泳の基本も教わった。いつも目の届くところにいないと親の不安はつのり、日が暮れてから帰宅すると、厳しく叱られることもあつた。

小学二年生頃



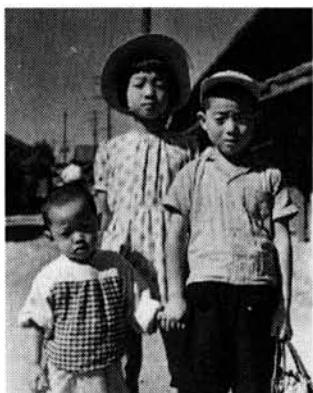
それでも、そんな両親の心配をよそに、昭宏は適度なわんぱくぶりも發揮して、裏山や神社の境内を元気に遊び回っていた。このころのニックネームは「あっちゃん」。家の商売にちなんで「ゲタアッキー」と呼ぶ仲間もいた。

新城小学校に進んだが、長ずるにつれ次第に昭宏のもつ豊かな才能に、春子は気がつき始めた。読み書きソロバン、どれも優秀な成績だった。折から一家は、疎開先の新城市から豊橋市に引っ越した。できるだけ恵まれた教育環境を与えたかった春子にとつても、好都合だった。昭宏は小学校五年生のときに転校し、豊橋市内の東田小学校で学ぶことになった。

むろん豊橋に出てても、今のような進学塾があるわけでもない。昭宏自身、ガリ勉タイプで知識をつめこむわけでもない。春子は、少しでも都会的な環境に置いた方が、子どもの才能が伸びると考えたのである。

一家が豊橋に出てきてからは、家族の生活はさらに忙しくなり、

三姉弟



活気づいてきた。しつかり者の春子は、新城市の下駄屋をまだ営業していた。店を開くため、午前七時ごろには豊橋の自宅を出て、電車で通勤していた。帰りは夜の十時ごろになることもあった。

夢を見るタイプの鏡平は相変わらず、いくつもの商売に手を出し、行商のためにリヤカーを引いて、外を回ることがあった。

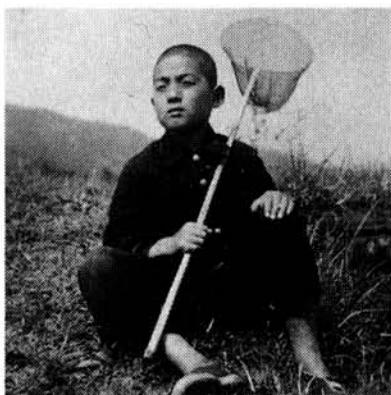
家に残されたのは、二歳年上の姉・雅子、昭宏、五歳下の弟・久雄、そして犬のコロである。太田家は、三人姉弟の団結でしつかり支えられていった。

## 働き者の三人姉弟

学校や遊びから帰つてくると、姉弟には多くの仕事が待っていた。姉の雅子は台所に立ち、トントンと庖丁を使い、料理を受け持つた。

昭宏は手を洗つて、米をとぎはじめる。ほどよい水加減で、ふつ

小学四年生頃



くらと釜の米を炊きあげるのが得意だった。さらに庭で薪（まき）を割り、フーザーと火をおこし、風呂を焚（た）いた。男の子の昭宏は、姉弟の中では、最大の労働力であり、なかなか忙しい。まだ小さい弟の久雄は、玄関先の掃除が主だった。

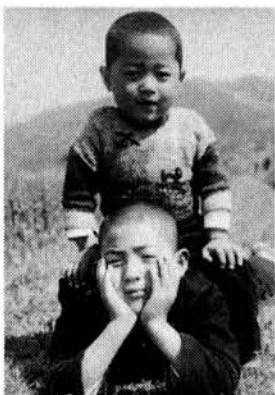
姉の簡単な料理に加え、母が温め直して食べられるように用意してくれた品が、小さなちゃぶ台に並び、夕食の時間になる。愛知は鶏肉の産地で、母が作り置いた鶏の煮物は、空きつ腹にたまらなくおいしかった。

仕事や学会活動で、まだ父も母も夕方、帰つていないことが多くなった。それでも姉弟は仲がよく、親に不平や不満をこぼすこともなかつた。むしろ自分たちのために働いてくれている父や母を誇りに感じていた。

やがて仕事を終えて帰宅する両親との対話も弾んだ。家で学会の会合が開かれることがあり、深遠な仏法哲学を語る声を、壁ごしに聞きながら、子どもたちは勉強し、太田家の夜は更けていった――。

またある時、鏡平の行商が思うようにいかず、思い切った設備投

弟・久雄と



資をし、自宅に手袋の編み機を導入したことがあった。一足あたり、わずかな工賃がつく内職である。小指から順番に、一、二、三、四、五、六……と数えながら手袋を編んでいく工程だった。鏡平はよく数をかぞえ間違え、指の長さが珍妙な手袋ができあがつてしまつた。

頭が柔軟な昭宏は、たちどころにコツをつかみ、器用に手袋を編み、内職の工賃を稼いでいた。朝早く登校前に一仕事、手袋を編むこともあり、小・中学時代から、一家の柱のように働いていた。

このころ、口の悪い友人からは「ナイショク」のあだ名で呼ばれていた。東田小学校でも成績優秀で、発言力や責任感もあり、いつも級長に推されていた。

## 母の愛情と子育て

決して裕福ではない一家だが、貧しさにおしつぶされる悲壮感や卑屈な影はなかつた。むしろ、カラリとした陽性な家庭で、みんな

親せきの家で、いとこたちと一緒に



が仲良く力を合わせていた。当時の記憶をひもとけば、それは灰色一色の世界ではなく、キラキラした砂金をふりかけたような、まぶしい思い出になつていてる。

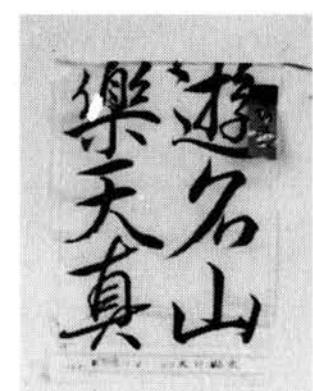
まだ、一家が新城市内にいたころである。父の鏡平が、冷やしたスイカを井戸の奥から上げて「おーい、スイカを切るぞ！」と家族を呼び集め、スパッと包丁で切ってくれた。ひとつずつスイカを切つて分け合うように、楽しいことや苦しいこともすべて家族で分かち合つてきた。

下駄屋を営む春子は、家にいなきことも多かつたが、放任していつたわけではない。勉強を押しつけることはなかつたが、最低限の読み書きソロバンだけは、子どもたちに習わせていた。

母の期待に、子どもたちは充分に応えていたようである。昭宏は、よく弟の久雄に、学力が伸びるようアドバイスした。

「いいか久雄、人が習字を五枚やるなら、お前は十枚やるんだ。人がソロバンを十問説くなら、お前は二十問やるんだ」

人の二倍、努力する——それはきっと、昭宏自身も自分に課して



習字で翠軒賞受賞

きた挑戦であつたにちがいない。三人の姉弟は、いずれも地元の伝統校・青陵（せいりょう）中学に進み、それぞれ在学中に、雅子は生徒会の副会長、昭宏も久雄も生徒会長をつとめている。

やはり昭宏をはじめ、姉弟がまっすぐに育つたのも、父と母の愛情をどこかで感じていたからと思われる。

雅子が高校に進むころ、一家の家計は一番苦しい時だつた。入学式が迫つても、新しい制服を買うゆとりがない。和裁・洋裁の技術にすぐれていた春子は、服地を買い求め、そこから雅子の学校の制服を縫い上げてくれた。

色や形は、他の生徒の制服と微妙に違つていただろうが、この制服に袖を通すたびに、雅子は母の愛情に包まれていることを感じただろう。うわべだけの激励やしつけより、はるかに子どもをまつすぐ育てる力になつたはずである。

また、少年たちの間で、ジャンパーが流行した時期もあつた。しかし新品を買う余裕はない。弟の久雄のために、春子は手縫いのジャンパーを用意し、子どもに恥ずかしい思いだけはさせなかつた。



三姉弟と犬のコロ

こうして振り返ってみると、太田家では、特別な教育をしたわけではない。昭和二十年代から三十年代にかけて、日本の社会はまだ貧しく、だれもが生きることに懸命だった。どの地にも春子のような母がいた。どの町にも、母が縫つてくれた服に、身を包む子どもたちがいた。

母の偉大さは、しばしば太陽にたとえられる。春子はあくまでも平凡な母であつたが、太陽のように自ら定めた軌道をためらうことなく動き続け、まんべんなく子どもに愛情の光をそそいだ。

戦後の大地に根を張った、昭宏たち三本の苗木は、温かい父母の光を十分に浴び、その内面に、自分を成長させる養分をたくわえていったのである。

## 「公明の時代が来るぞ！」

少し時代はさかのぼるが、昭宏が小学校低学年のころ、父の膝の

上でよく耳にしたラジオ放送がある。時々スピーカーの音が割れる  
旧型ラジオから、熱のこもった声が伝わってきたことを、ぼんやり  
覚えている。

それは、NHKの国会ラジオ討論会だった。思想遍歴を重ねてい  
た父だが、友人のひとりに日本共産党の党員がいて、政治にも  
関心を示していた。おそらく昭和二十八年前後のことである。

サンフランシスコ講和条約が昭和二十六年に結ばれ、日本が独立  
国家として歩み始めた時期である。ラジオ討論会の内容まで昭宏は  
記憶していないが、熱心に耳をかたむける父の表情は印象的だった。

年代からすれば吉田内閣の時代で、独立国家の礎となる政策論議  
がラジオから流れていたはずである。いざれにせよ、昭宏が初めて  
触れた「政治の熱気」が、ラジオからこぼれていた。

当時は、今のような無党派層もなく、ひとたび町会議員選挙など  
があれば、町中あげて、それぞれの陣営が力のこもった遊説活動を  
繰り広げていた。まるでお祭り騒ぎのような立会演説会もあつた。  
高度経済成長という「経済の季節」がはじまる以前であり、日本は

熱い「政治の季節」のまつただ中にあった。

また昭和三十年代の後半にさしかかるころ、鏡平は時折、家に届く薄手の新聞を熱心に読むようになつた。それは現在の『公明新聞』の前身で、『第一新聞』と呼ばれるものだつた。

「昭宏、すごい新聞だぞ。この新聞を読めば、世の中のことが、みんな分かるんだぞ」と誇らしげに『第一新聞』を振りかざした。

そんな鏡平を家族たちは「また父ちゃんの、すぐに夢を見るクセがはじまつた」と少し冷ややかに見つめていた。

「昭宏、これからは公明の時代だ。公明が民衆を守るすごい時代が来るぞ!」

ロマンチストの鏡平にも、まさか自分の息子が公明党の政治家となつて、民衆のために働く時代が来ることを、この時点では夢にも思わなかつた――。